

窓見るやうに

三島ちとせ

- 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
- 啓蟄や斑に飴の甘さあり
ひと肌の酒買ふバレンタインデー
卒業や写真傾くやうに貼る
額拭く布の白さや春の風邪
鳥は喪に服す声あり春の昼
駅あれば厨房があり黄砂降る
流水の隙間に海の昏さかな
水葬や磯巾着は泡を喰ふ
一人暮らし巣箱に藁を詰めてゆく
一間の土入れ替へて胡瓜蒔く
佃煮に生きてゐる眼や夏兆す
牛乳に戻らぬバターこどもの日
ななとしち使ひ分けぬ子若葉風
鳥巣立つ東の景に標あり
茄子植ゑて蕾は星のやう萎む
リラ冷や羊毛並ぶ直売所
薄暑光髭剃りの刃は波を打ち
薔薇園に鳥迷ひ込む静けさよ
色褪せぬ写真早乙女立ち止まり
手に止まる蛍に誰も怖がつて
短夜や消毒液の底に泡
エンドロールに嗤ふ双子や半夏生
七月に茶毘は果実の匂ひして
白地図の故郷探して晩夏光
南風吹く旅立つ夜の滑走路
- 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26
- 笹舟に航路ありけり石清水
身体から臭ふ涙や昼寢覚
白湯を飲む心地梅雨に入る夜明け
万博や冷やし中華の箸太し
拍手待つやうに蜘蛛の巣広がりぬ
手火花や燐寸の溢れたる昭和
這ひあがるやうに大暑の寢床かな
半分の花濡らされて墓参り
秋涼し事務員と星見てゐたり
右利きの鸚鵡に左利きの鳶
星月夜歩行求めて哺乳類
流星や海底都市に樹木あり
野分立つ投票箱は空となり
顕微鏡越しの会話や風祭
梨二つ三つ無人島出るならば
農場に残りし骨や野稗刈る
腕は緋の痣から夜寒始まりぬ
口紅の切り口に合ふ夜霧かな
初雪の水と変はらぬ化学式
白衣乾かして冬暁の美術室
肉牛の鼻滑りたる寒さかな
雑談に人の生き死に冬日差
密談のごとき漫才おでん煮る
居酒屋の刺身透けたる睦月かな
面接は窓見るやうに日脚伸ぶ